「生きた英語」でコミュニケーションを図る生徒を育む英語科の授業
～形式・意味・機能とその結びつきを意識した表現の工夫を通して～

Ⅰ　はじめに

現在の生徒が社会で活躍する2050年頃には、協調と競争をする国際的な環境の中で、多文化・多言語・多民族の人たちが身を置いていると予想される。そうした中で、様々な社会的・職業的な場面において、外国語を用いたコミュニケーションを行う機会が格段に増えると考えられる。文部科学省の英語教育の在り方に関する有識者会議では、グローバル化の進展の中で、「国際共通語である英語力の向上は日本の将来にとって不可欠」[1)]であるといわれている。英語力の中でも、特に外国語（英語）によるコミュニケーション能力の育成が求められている。学習指導要領解説では「グローバル化が急速に進展する中で、外国語によるコミュニケーション能力は、これまでのように一部の業種や職種だけでなく、生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定され、その能力の向上が課題となっている」[2)]と述べられている。併せて、OECDによるOECD Future of Education and Skills 2030や学習指導要領で言及されているように、学習における生徒の主体性についても、外国語によるコミュニケーション能力の育成と関連付けて考えていく必要がある。この先社会はより予測困難な時代になり、英語を聞いて理解したり、質問に答えたりするだけの表面上のコミュニケーション能力ではなく、英語を使って未知の状況に対応し、自分事として考えて諸問題を解決することができるコミュニケーション能力[注1)]の育成が求められている。そのために、中学校の３年間では、まずは与えられた単元での課題に対して、主体性を発揮して課題を達成できるようにコミュニケーション能力を育てていく必要があると考える。課題を与えた際、現時点での自分の力だけで課題に取り組ませることで、課題達成の難しさを自覚させ、自分に不足していることや今後学ぶべきことについて気付かせる。そうすることで、個々の生徒が単元での学びに対して問題意識をもって、主体性を発揮すること[注2)]につながると考える。加えて、他の生徒と意見交流をして課題達成に向けて工夫を考えさせることで、より効果的にコミュニケーション能力を育成できると考える。

コミュニケーション能力の育成に関して、教科書で取り扱われている文法事項をそのまま生徒に提示し、繰り返し練習させて覚えさせ、フレーズや例文をそのまま使って会話やスピーチをさせるといった、いわゆるPPP[注3)]型の指導の改善が近年求められている。しかし、指導のしやすさから、未だにPPP型の指導を行っている授業は少なくない状況である。このPPP型の指導では、この先求められるようなコミュニケーション能力を育てることは難しいと考える。松村昌紀はこのPPP型の指導による結果として、「英語という言語は学習者にとって、現実から離れた誰かの言葉、自分とは別の認識空間に存在する言葉として、いわば『真空に浮かんで』存在することになる」[3)]と述べている。鈴木渉が「フォーカス・オン・フォーム[注4)]が目指すのは、（中略）真のコミュニケーション場面で活用できる知識の習得である」[4)]と述べているように、本校英語科では、PPP 型の指導のような形式重視の教授法と、意味重視の教授法のバランスを取った教授法である、フォーカス・オン・フォームの考え方を基に授業を進めている。授業の中で実際の目的・場面・状況を意識させ、表現を工夫させることや、文法事項が実際の目的・場面・状況でどのように活用できるかを理解した上で使用させることを通して、コミュニケーション能力を育てていく必要があると考える。

そこで英語科では、外国語によるコミュニケーション能力について改めて捉え直し、外国語による

コミュニケーション能力とは、英語の音声や文字を用いて、情報や考え、思いを理解したり、意図した通りに表現したり、伝え合ったりする能力であると定義した。コミュニケーション能力に関して、フォーカス・オン・フォームを生かした授業づくりを提案している和泉伸一は、言語習得には「言語形式」、「意味内容」、「言語機能」（以下、形式、意味、機能）の３要素が常に関わっているとしている。本校英語科では、形式をある語句やフレーズの発音、語彙、文法、綴りなどといった形式的な要素、意味はある語句やフレーズが日本語でどのような意味を伝えているのかという内容的な要素、機能はある語句やフレーズをどのような時に使用するのか、使用したときにどのような働きがあるかという要素であると定義する。和泉は「コミュニケーション能力とは、この３要素を効果的に結び付けていける能力であり、それゆえに、言語習得の鍵も、これら３要素の密接な結びつきを学んでいくことにあると捉えることができる」[5)]と述べている。３要素を結びつけるとは、それぞれの要素をバラバラに捉えるのではなく、三つで一つのものであるとまとめて捉えて考えることである。一つでも要素が欠け、結びついていない状態の英語や、とりわけ機能の結びつきが弱い英語が、前述の PPP 型の指導の結果であり、表面上だけのコミュニケーション能力の育成につながってしまうものであると考える。

さらに、和泉は、形式・意味・機能の結びつきがなく、実生活とのつながりのない英語を「死んだ英語」と呼び、「コンテクストがあると、英語が生きてくる。コンテクストと意味内容は、『死んだ英語』を『生きた英語』に変えるためには必須なのである」[6)]と述べている。ここでいうコンテクストとは、コミュニケーションの目的・場面・状況のことである。英語を形式や意味だけ捉えて受動的に学び、いざ表現しようとしても、実際のコミュニケーションでは使えない「死んだ英語」になってしまう。コミュニケーションの目的・場面・状況を意識し、英語のもつ形式・意味・機能とその結びつきに基づいて英語で表現したとき、それは「生きた英語」になると言える。形式・意味・機能を結びつけ、目的・場面・状況に応じた英語を用いることが、本校英語科における深い学びであると考える。そして、この深い学びを達成した姿が「生きた英語」でコミュニケーションを図る姿であると考える。

「生きた英語」を習得するために、授業では、実際のコミュニケーションの目的・場面・状況を意識させられるよう、オーセンティックな題材を活用し、課題の設定を具体的に行う。この課題の設定が、学びの文脈をつくり出し、形式・意味・機能を結びつけるためにも必須なものである。また、個々の単語や表現に関して、形式だけの暗記や反復練習にならないように、実際にコミュニケーションの中で使用させられるよう言語活動を工夫し、使用させる中で、形式・意味・機能を理解し結びつけられるようにしていく。また、その際には文章を読んで話し合ったり、聞いたことを基に意見を述べたりと、「聞くこと」「読むこと」「話すこと」「書くこと」の４技能を効果的に関連付ける統合的な言語活動を行い、実際の英語使用場面をより意識させる。これらの活動を通して、知識の精緻化[注5)]を促し、「生きた英語」を習得できるようにしていく。

以上のことから、英語科では、研究主題を「『生きた英語』でコミュニケーションを図る生徒を育む英語科の授業－形式・意味・機能とその結びつきを意識した表現の工夫を通して－」と設定し、研究に取り組むこととした。

Ⅱ　研究の概要

１　英語科で目指す生徒像

英語科では、目指す生徒像を以下のように設定し、研究に取り組むこととした。

「生きた英語」でコミュニケーションを図る生徒

２　育みたい資質・能力

英語科における目指す生徒像に近づけるために、次の資質・能力を育みたいと考えている。

形式・意味・機能を結びつけ、目的・場面・状況に応じて、表現を工夫して伝えることができる力

英語のもつ形式・意味・機能を結びつけるためには、それぞれの要素を理解した上で、実際に英語を使用する中で、３要素が結びついた表現の効果を実感させることが重要である。この結びつきに基づき、コミュニケーションの目的・場面・状況に応じて、伝えたいことを伝えるためにより適切な表現を選択したり組み合わせたりすることが、表現の工夫である。また、３要素が結びついた表現を目的・場面・状況に応じてどのように組み合わせるかといった構成面での表現の工夫も、コミュニケーションにおいて不可欠である。単元の中で、英語のもつ形式・意味・機能とその結びつきの学習と、コミュニケーションの目的・場面・状況に応じて表現を工夫する活動を行うことを通して、この資質・能力は育まれ、「生きた英語」でコミュニケーションを図ることにつながると考える。

３　資質・能力を育むための手立て

資質・能力を育むためには、課題に対する問題意識をもたせて、主体性を発揮させることが重要である。また、資質・能力につながる単元での学びを深めるためには、主体性を発揮した生徒の学習が学びの文脈に沿うように学習を調整させることも必須である。そこで英語科では、上記の二つを意識して、単元構成や学習内容に関わる手立てと、生徒が実際に記録する学習プリント（後掲資料１ Performance Checker）に関する手立てを設定する。

(1) 課題と Section（場）の設定

ア　課題について

単元全体を通しての課題を提示する。これは総論における「課題」と同義である。ただし、英語科における課題は、単元全体に学びの文脈をつくり出すものであると同時に、単元で学ぶ表現の形式・意味・機能を結びつける役割を果たせるように設定する。加えて、コミュニケーションの目的・場面・状況を意識させられるよう、前述の通りオーセンティックな題材とする。なお、英語科におけるオーセンティックな題材とは、生徒の想像が及ぶ範囲の現実味のある目的・場面・状況で、生徒自身の立場で考えられる題材とする。

イ　Section（場）について

単元の基本的な学習の流れとして、Training Section（以下 TS）→Advanced Section（以下 AS）→Performance Section（以下 PS）→Reflecting Section（以下 RS）の四つの Section を設定し、学習活動を整理して単元を進める。課題の提示、課題に対する問題の設定、問題解決、課題の達成とその振り返りを順序立てて行わせることで生徒が問題意識をもつことができるようにし、主体性を最大限発揮できるようにする。各 Section における活動は次の通りである。

Training Section　【形式・意味・機能とその結びつきの基礎を学ぶ】

・課題を提示し、パフォーマンステストと同様、または似た形式でやり取りやスピーチ、ライティングを行わせる。[注6)]

・学習の見通しをもたせるために Performance Checker（後述）で単元の目標を提示し、課題達成に向けた個人的な問題を設定させる。

・教科書を活用し、課題達成に必要となる知識を確認したり、知識を実際の場面で使えるようにするための言語活動に取り組ませたりする。なお、その際に、形式・意味・機能のそれぞれの要素を意識させられるよう工夫する。

・既習事項の復習や、教科書の場面に関連したスピーチややり取りなどの言語活動に取り組ませることで、限定的な場面での形式・意味・機能の結びつきを実感させる。

・AS や PS で活用できるような表現の練習や準備に取り組ませる。

・学んだことは、Performance Checker に記録させる。

Advanced Section　【目的・場面・状況を意識した上で、形式・意味・機能を整理する】

・パフォーマンステストと同様、または似た形式でやり取りやスピーチ、ライティングを行い、課題達成に向けてそれまでに学んだことをどのようにいかすかを考えさせる。

・グループ活動や教師のモデルを通して、課題達成に向けて有効な形式・意味・機能とその結びつき、それらに基づいた表現の工夫について、グループや学級で意見交流や意見共有をさせる。[注7)] この活動を通して、TS の時よりも汎用性のある形式・意味・機能の結びつきを実感させる。

・Performance Checker を活用し、パフォーマンステストで個人としてどのような表現の工夫をすればよいかを考えさせる。

Performance Section　【実際に「生きた英語」を用いる】

・課題達成のためのパフォーマンステストを行う。スピーチとやり取りの様子は ICT 機器で録画させる。

Reflecting Section　【「生きた英語」を振り返り、実際のコミュニケーションで使えるものにする】

・パフォーマンステストの中での形式・意味・機能とその結びつきを中心とした振り返る際の視点を確認させる。また、自身の設定した問題を改めて確認させる。

・単元最初とパフォーマンステストでの自分の様子を見返させ、課題の達成ができたか、形式・意味・機能を結びつけ、目的・場面・状況に応じて表現を工夫することを通して「生きた英語」でコミュニケーションを図ることができたかを Performance Checker を使って振り返らせる。

・個別に設定した問題についても解決できたか、どのように解決したかを Performance Checker を使って振り返らせる。

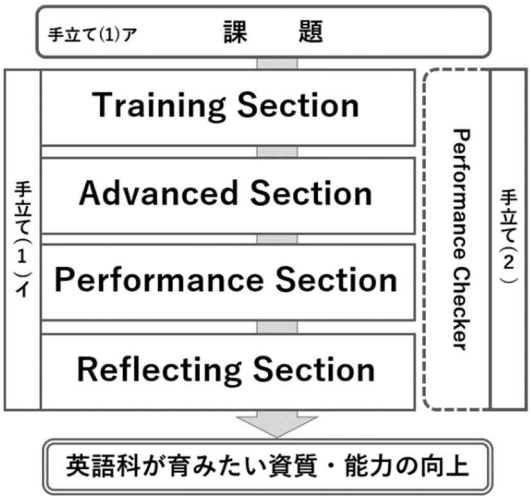
・Performance Checker を使って、単元の学習方法について振り返らせる。

(2) Performance Checker の記録

生徒が単元を通して記録をする学習プリントとして、Performance Checker を作成する。Performance Checker には、単元を通した課題と単元目標を明記することで、単元の初めに単元を通した学びの見通しをもつことができるようにさせる。また、単元最初のパフォーマンス後に、課題達成に向けて解決すべき問題を記述させることで、各個人の問題を明確にし、学習の方向性を定めさせる。これらにより、単元全体を通して主体性を発揮させるようにする。なお、この際の問題は、単元での学びを意識させるため、単元の課題に対して、形式・意味・機能の３要素と関わる形

で設定をさせる。そうすることで、単元での学びの文脈に沿わせる。具体的には、TS の段階から、毎時間の授業で学んだことを形式・意味・機能とその結びつきが分かるように記録させ、それらを明示的に振り返ることができるようにする。AS の場面で、意見交流や意見共有して学んだことを記録させることで、課題達成のための表現の工夫を明確に考えられるようにする。そして、PS でパフォーマンステストをする前に、それまで学んだことのまとめとして、課題を達成するために重要だと考える形式・意味・機能が結びつき、目的・場面・状況に応じた表現の工夫を記述させる。そして、パフォーマンステスト後の RS の場面で、単元最初とパフォーマンステストの様子を比べさせ、その変化を成長として記録させる。最後に、単元を通して「生きた英語」でコミュニケーションを図ることができたかについて自己評価させ、どの学習が有効であったか、もしくはなぜ身に付けることができなかったかに関して記述させて振り返らせる。

以上のように、資質・能力を育むための二つの手立てを表したものが右図１となる。



【図１　資質・能力を育む手立て】

４　資質・能力が育まれたかの評価について

「生きた英語」として形式・意味・機能を結びつけ、目的・場面・状況に応じて表現を工夫できたかを、Performance Checker の記録から見取る。そして、記述した表現の工夫を実際にパフォーマンステストで用いることができたか、つまり、「生きた英語」として使うことができていたかを、パフォーマンステストの様子から見取る。この二つを通して、手立てが有効であったかを検証する。

５　研究の経緯

１年次では、資質・能力を育む手立てとして、課題と Section（場）の設定、Performance Checker の記録が有効であるかを検証した。

一つ目の手立てについては、単元の初めに実際に課題に取り組ませたことで、多くの生徒が課題の目的・場面・状況を意識して、自分自身の問題を設定し、その問題を解決しようと学習に取り組んでいた。このことから、課題の設定によって、主体性を発揮させることができたと考える。そして、その後に続く Section（場）の設定により、TS において単元の中でねらいとする表現の形式・意味・機能とその結びつきを理解させ、AS、PS において目的・場面・状況に応じて単元の中でねらいとする表現の使用を促すことができた。

一方で、課題の設定に関して、単元の中でねらいとする表現の使用を促そうとするあまり、現実味のない場面や状況になってしまい、その結果、単元の中でねらいとする表現の必要性を感じさせにくい課題になってしまうことがあった。単元の中でねらいとする表現の必要性を感じさせられるように、既に目的・場面・状況のいずれかを含んでいる課題の設定を工夫する必要があったと考える。

二つ目の手立てについては、Performance Checker に単元を通した自分自身の問題を設定させた。これにより、AS、PS において、課題の目的・場面・状況に応じて自分が記録してきたものの中から必要な表現を選び、パフォーマンスで使おうとしていたことから、自らの学習を調整させ、学んだことの中から表現の工夫を考えさせることができた。

一方で、Performance Checker には、課題達成に必要な表現として、学習した順に形式・意味・機

能が記述されていたことから、学んだ知識がどのように関連しているのかが捉えづらかった。そのため、知識の精緻化が起こりづらかったと考える。課題達成に必要な表現について、機能を中心に分類してまとめさせることで、知識の精緻化につなげ、課題の目的・場面・状況とつながりやすくしていく必要があったと考える。

そこで２年次では、単元の中でねらいとする表現が、提示された課題の目的・場面・状況の中で必要となるように課題を再検討した。具体的には、課題を設定する際に、教科書の題材に関連したものや生徒の生活に身近なオーセンティックなものにしたり、単元の中でねらいとする表現が用いられた資料を使用させるものにしたりした。そうすることで、単元の中でねらいとする表現が効果的に用いられている場面を設定することにつながり、その表現の使用を促すことができた。加えて、「課題を達成するために大切にしたいこと」を、目的・場面・状況を踏まえて考えさせ、共有させることで学びの文脈をつくることができた。それを踏まえて、課題を達成するために必要な自分自身の問題を設定させた。学習を進める中で自分が設定した問題の解決状況を振り返って、別の解決方法を試したり、自分のパフォーマンスをよりよくするために、「課題を達成するために大切にしたいこと」を意識して新たな問題を設定したりする過程を経ることで学びの文脈に沿わせることにつながった。これらにより、単元の中でねらいとする表現を使用することに意識を向けて学習を進めることができた。また、単元で学習した知識の精緻化を図るために、AS でのコミュニケーション活動において、活動に何度も取り組ませて発話量を増やすことで表現の種類を広げたり、コミュニケーション活動後の振り返りにおいて、学習支援ツールを用いて使用した表現を全体で共有したりした。そして、AS でのコミュニケーション活動の中で使用した表現を、機能を中心に分類してまとめさせることで、知識の精緻化につながり、課題の目的・場面・状況とつながりやすくすることができた。

しかし、「課題を達成するために大切にしたいこと」を踏まえて自分自身の問題を設定する際に単元の中でねらいとする表現ではなく、単語に焦点が当たってしまうことが多かった。また、AS でのコミュニケーション活動において、課題について生徒がもつ背景情報が似通っており、生徒が使用した表現に広がりが見られなかったことがあった。これらにより、機能を中心に分類してまとめさせることが十分に行えず、知識の精緻化につながりにくかったことがあった。

以上のように学びの文脈をつくり、沿わせる場面において改善の余地があったり、AS でのコミュニケーション活動において、生徒が使用した表現が似通ってしまい、表現の幅を広げることができず、知識の精緻化につながりづらかったりしたなど、課題が残った。そこで、最終年次のねらいを以下のように設定した。

６　最終年次のねらい

これまでの研究の成果と課題を基に、「課題を達成するために大切にしたいこと」を考えさせる場面を工夫することと、単元で学習した知識の精緻化を図るために AS でのコミュニケーション活動を工夫することを通して、資質・能力を育み、英語科が目指す生徒像に近づけていく。

これまでの研究の成果と課題を踏まえ、最終年次では、本校英語科が目指す生徒像である「『生きた英語』でコミュニケーションを図る生徒」に近づけるために、以下の二つのねらいを設定する。

まず、学びの文脈をつくるために、単元の中でねらいとする表現が、提示された課題の目的・場面・状況の中で必要となるように課題を設定する。課題を提示する際は、「課題を達成するために大切にしたいこと」を、目的・場面・状況を踏まえて考えさせる。その際、どんなことを話したり、書いたりする必要があるかといった内容に関することと、その内容を伝えるための言葉の働き（機能）を考

えさせ、課題を達成するための見通しをもたせる。その後、自分自身の問題を設定させる。自分自身の問題を設定させる際も、課題を達成するために必要とされる内容や表現に焦点を当てて設定させる。このようにすることで、学びの文脈をつくり、沿わせることにつながると考えられる。課題に対する問題意識をもたせて、課題を達成するために必要とされる内容や表現に焦点を当てて学習を進めていくことが資質・能力を育むことに有効だったかどうか、Performance Checker の記述やパフォーマンステストの様子から見取っていく。

次に、単元で学習した知識の精緻化を図るために、課題の内容や単元の中でねらいとする表現に応じて、AS でのコミュニケーション活動を工夫する。具体的には、使用する言語材料は同じであっても、コミュニケーションをする相手を替えたり、伝える内容を変えたりして活動を繰り返し行うことや、聞いたり読んだりしたことを踏まえてやり取りしたり、発表したり、書いたりするといった統合的な言語活動を行っていく。実際の英語の使用場面を考えてみても、このような統合的な言語活動が多く、その活動にはコミュニケーションの目的・場面・状況が含まれている。このような活動をすることは単元の中でねらいとする表現を繰り返し用いることにつながる。そして、活動後に、生徒が使用した表現について振り返らせ、機能を中心に分類して表現をまとめていく。そうすることで単元で学習した知識を精緻化させることにつながると考えられる。以上から、単元で学習した知識を精緻化させることが、資質・能力を育むことに有効だったかどうか、コミュニケーション活動やパフォーマンステストの様子から見取っていく。

Ⅲ　おわりに

最終年次では、これまでの研究の成果と課題を基に、本校英語科が目指す生徒像である「『生きた英語』でコミュニケーションを図る生徒」に近づけるために、「課題を達成するために大切にしたいこと」を考えさせる場面を工夫することと、単元で学習した知識の精緻化を図るために AS でのコミュニケーション活動を工夫することの二つのねらいを設定した。

「課題を達成するために大切にしたいこと」を考えさせる場面で、課題達成に向けてどんなことを伝えるとよいか（内容）を考えさせてから、その内容を伝えるための言葉の働き（機能）を考えさせることで、課題達成のための見通しをもたせることができ、学びの文脈をつくることにつながった。そして、それらを基に自分自身の問題を設定させたことで、学びの文脈に沿わせることつながり、主体性を発揮させながら単元の学習を進めさせることができ、深い学びの達成につながった。

また、AS の場面では、統合的な言語活動を、ペアを替えて複数回行わせた。生徒の発話の中で、単元で学習する表現が繰り返し用いられており、コミュニケーション活動後には使用した表現を課題達成に必要な表現としてまとめることができたことが分かった。そして、生徒は、AS でのコミュニケーション活動で用いていた表現をパフォーマンステストでも用いることができた。このことから、単元で学習した知識の精緻化につながったと考える。

以上のことから、育みたい資質・能力である形式・意味・機能を結びつけ、目的・場面・状況に応じて、表現を工夫して伝えることができる力を育むことにつながったと考えられ、本校英語科が目指す生徒像である「『生きた英語』でコミュニケーションを図る生徒」に近づけることができた。

注１） 表面上のコミュニケーション能力との大きな違いは、その場の目的・場面・状況に応じ、自分の考えや思いに即した英語を用いて、相手とコミュニケーションを図ることができるかという点であると考える。表面上のコミュニケーション能力では、自分の考えや思いが適切に伝わらなかったり、相手に違和感を抱かせてしまったりすることが考えられる。

注２） 英語科における主体性を発揮した姿とは「課題達成のために自分に足りない表現等を問題として見出し、単元の中で問題を解決しようとしている姿」と定義する。

注３） Presentation（提示）、Practice（練習）、Production（表出）の略で、特定の文法事項を明示的に学ばせた上で、正確に使用させることに重点を置いた教授法である。PPP 型の指導で学んだ表現は、授業内で用意された限定的な場面での使用はできるが、実際の場面での応用が難しいと考える。

注４） 意味の伝達をする中で、学習者の注意が言語表現に向けられることをねらいとした教授法である。本校英語科では、対象となる文法事項が自然な形で使用される現実の場面に即した課題の設定を行い、その場面の中でコミュニケーションを図るようにさせ、意味の伝達と表現に対する注目の両立を図ることを目指している。

注５） 本校英語科では、知識を「形式・意味・機能の結びつき」と定義する。また、知識の精緻化を「知識を機能を中心にして分類し、ネットワークを構築すること」と定義する。

注６） 本校英語科では、共通の課題に対して、各々の差に応じて問題を設定し解決していくことを、個に応じた学びとして考え、個別最適な学びと捉えている。

注７） 本校英語科では、課題達成に向けてグループや学級で意見を共有したり、意見を交わし合ったりする際に、協働的な学びが起こると考えている。

引用文献

１） 文部科学省英語教育の在り方に関する有識者会議『今後の英語教育の改善・充実方策について報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～』、2014 年

２） 文部科学省『中学校指導要領解説外国語編』開隆堂、2018 年、５ページ

３） 松村昌紀編『タスクベースの英語指導－TBLT の理解と実践』大修館書店、2017 年、11 ページ

４） 鈴木渉編『実践例で学ぶ第二言語習得研究に基づく英語指導』大修館書店、2017 年、187 ページ

５） 和泉伸一『「フォーカス・オン・フォーム」を取り入れた新しい英語教育』大修館書店、2009 年、138 ページ

６） 和泉伸一『フォーカス・オン・フォームと CLIL の英語授業　生徒の主体性を伸ばす授業の提案』アルク、2016 年、16 ページ

参考文献

和泉伸一『第２言語習得と母語習得から「言葉の学び」を考える』アルク、2016 年

鈴木渉･佐久間康之･寺澤孝文『外国語学習での暗示的・明示的知識の役割とは何か』大修館書店、2021 年

後掲資料１

Unit 6,7,8 “Let’s Introduce Your Favorite!” Performance Checker

【単元の目標】

第三者の紹介について、感想を交えてまとまりのある内容で紹介することができる。[CAN-DO リスト：話すこと[発表] １年前半]

【単元の課題】

ある人物の魅力を相手に知ってもらうために、基本的な情報や自分の考え、気持ちなどを整理して、まとまりのある内容で紹介しよう。（発表１分程度）

＜学習の流れ（予定）＞

第１時	First Try
第２～１０時	教科書で必要なことを学習+準備
第 11・12 時	Second Try＆意見交流＆準備
第 13・14 時	パフォーマンステスト
第 15 時	振り返り
第 16 時	単元テスト

【自分の学習の調整】

■　課題を達成するために大切にしたいこと

課題達成に向けて、どんなことを伝えたら良いか（内容）	その内容を伝えるための言葉の働き（機能）
※ １番大切な（伝えるべき）内容に○	※ １番大切にしたいことに○

1　解決したい自分の問題（課題に対する「内容」と「表現」に焦点を当てて書きましょう

解決したい自分の問題	解決するために努力したり意識したりすること
内容	内容
表現	表現

2　問題解決の中間振り返り

問題の解決度（当てはまるものに○）	学習の改善方法（解決済み３・４なら新たな問題設定）
未解決　もう少しで解決　何とか解決　解決して自信がついた １　・　２　・　３　・　４	内容面
未解決　もう少しで解決　何とか解決　解決して自信がついた １　・　２　・　３　・　４	表現面

3　問題解決の単元末振り返り

問題の解決度（当てはまるものに○）	理由（なぜ解決できたか or なぜできなかったか）
未解決　もう少しで解決　何とか解決　解決して自信がついた １　・　２　・　３　・　４	内容面
未解決　もう少しで解決　何とか解決　解決して自信がついた １　・　２　・　３　・　４	表現面

4　単元の学習全体の振り返り

(1) 単元の目標は達成できたか	できなかった ←　１　・　２　・　３　・　４　→ 自信をもってできた

(2)　○課題を達成するために有効だった学習方法とその理由　●改善すべき学習方法とその理由

活動例：教科書の音読、本文の内容理解、文法練習、コミュニケーション活動、スピーチ・やり取り練習、意見交流、モデル視聴

○

●

態 /3

○　パフォーマンステスト　自己評価・先生からの評価

自己評価(数字一つに○)		先生からの評価	
・文法の正確さ	3　2　1	・文法の正確さ	3　2　1
・発音の正確さ	3　2　1	・発音の正確さ	3　2　1
・内容1	7　6　5　4　3　2　1	・内容1	7　6　5　4　3　2　1
・内容2	3　2　1	・内容2	3　2　1

知 /6

思・態 /10

☆　パフォーマンステストの評価

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度 PT	主体的に学習に取り組む態度 PC

（参考）点数と評価の関係

	知	思	態
A	５・６	８～１０	１１～１３
B+		7	１０
B	３・４	５・６	７～９
B-		4	6
C	2	3	5

Class　1 -　　No.　　Name

＜**課題達成に活用できそうな My 表現集**＞ 大切にしたいことに対して、それを表す形式（英語表現）と意味を書き溜めていきましょう。

（例）課題を達成するために大切にしたいこと（機能）「例を挙げる」
（例）For example「例えば」　such as「～のような」
大切にしたいこと（機能）「　　」
大切にしたいこと（機能）「　　」
大切にしたいこと（機能）「　　」
大切にしたいこと（機能）「　　」

○　課題を達成するために必要な表現の工夫

その表現を使う目的	形式「意味」	機能
例）相手の意見を引き出すため	What do you think? 「あなたはどう思う？」	相手が思っていることをたずねる働き

Unit 6,7,8 ルーブリック（評価指標）

知 《正確さ》 ・文法	3	単語や文法、語法に間違いがほぼ見られず、意味が伝わる英文となっている（間違い：０～２）。
	2	単語や文法、語法にやや間違いが見られるが、意味が伝わる英文となっている（間違い：３～４）。
	1	単語や文法、語法に間違いが多く見られ、意味が伝わらない（間違い：５以上）。
知 《正確さ》 ・発音	3	正しい発音でやり取りできている（間違い：０～２）。
	2	発音にやや間違いがある（間違い：３～４）。
	1	発音に間違いが多い（間違い：５以上）。
思 《内容①》 ・推しの魅力	+1	全体としてつながりのある内容を話している。
	+1	推しの基本的な情報を複数伝えている。
	+2	伝えた情報に関わらせて、さらに詳しく紹介をしている。
	+1	何をしている写真かを伝えている。
	+1	感動を伝えている。
	+1	問い掛けをしている。
思 《内容②》 ・情報量 ※　挨拶は除く	3	推しの魅力を紹介するための十分な情報を伝えている。（10文以上）
	2	推しの魅力を紹介するための情報を伝えている。（７～９文）
	1	推しの魅力を紹介するための情報が少ない。（６文以下）

Class　1 -　　No.　　Name